

私たちの自然



公益財団法人 日本鳥類保護連盟
Japanese Society for Preservation of Birds

●庭に小鳥を 巣箱を架けてみよう

●フィールド探検をやってみた ペリット探しをやってみた

生きものはつながっている

◆ホオジロの仲間

◆ススキ 私たちの自然と文化に根付いた植物



2026
1・2
No 662

出水のツルたち

1月から2月、鹿児島県出水市で撮影

冬の出水に行くと、一万羽以上のツルたちが出迎えてくれます。その万羽ツルの中から数少ない種をみつけた時は、夢中になって撮影してしまいます。

江口欣照（東京都府中市）



ソデグロツル



アネハツル



カナダツル



クロツル

スタッフだより

店長不在の JBF

昨年10月下旬、奄美宇検村での国際サシバシンポジウムへ出張予定だった数日前のこと、予定を変更し奄美行きをあきらめざるを得なくなる事態が発生しました。職員O氏の急病・入院による業務分担で、職員Y氏と一緒にジャパンバードフェスティバルの出展を担当することになったからです。

わがブースを毎年仕切っているO氏が不在のうえ、入院当初は連絡もできない状況で、臨時店長Y氏を中心に手探りで何とか準備を済ませ、当日を迎えました。好天に恵まれ、たくさんのお客さんにおいでいただき、販売協力のペッツイシバシさんや職員M氏、アルバイト職員O氏とともに2日間なんとかやり過ごすことができました。私はブース内で巣箱の組み立てなど、店長不在の穴を埋めるべく汗を流しました。

O氏はその後無事退院し職務復帰しておりますが、無理をすると回復に支障があるため今までのような働き方はできません。今後もしばらくの間商品発送などで遅滞が発生する可能性がありますので事情ご賢察賜りますようお願いいたします。私もしばらくは巣箱担当として金槌をふるいます。

中島慶二（専務理事）

※執筆者の都合により、今号の植物豆知識は休載とさせていただきます。



私たちの自然



第 67 巻 No.662 2026 年 1・2 月号

- 2 年頭所感 (小宮輝之)
- 3 クラウドファンディング報告 (連盟 調査研究室)
- 4 庭に小鳥を 巣箱を架けてみよう (藤井 幹)
- 6 フィールド探検をやってみた ペリット探しをやってみた! (吉田裕樹)
- 8 羽根探偵の謎解きファイル ～エピソード 6～ (郷上マナツ)
- 10 令和 8 年度 愛鳥週間用ポスター原画コンクール 入賞者&入賞作品!
- 12 生きものはつながっている
ホオジロの仲間 (藤井 幹)
- 14 生きものはつながっている
ススキ 私たちの自然と文化に根付いた植物 (秋山幸也)
- 16 登録者のバードピア紹介
長浜農園 ～農地初のバードピアの紹介～ (樋口公平)
- 18 第 59 回全国野生生物保護活動発表大会が開催されました!
(連盟 普及啓発室)
- 20 第 59 回全国野生生物保護活動発表大会 講評
- 21 第 5 回国際サシバサミット in 宇検村が開催されました (連盟 調査研究室)
- 22 フィリピンでの活動 (連盟 調査研究室)
- 23 連盟だより
- 24 使用済み切手・カード類提供のお願い/商品の注文について/
バックナンバーの提供について/会費の有効期限の見方/広告募集/
編集後記

ネイチャーフォト
出水のツルたち (江口欣照)
スタッフ日より
店長不在の JBF (中島慶二)

表紙のことば

中島慶二 (連盟 専務理事)

雪が積もった次の朝

(1 月、城山湖展望台付近にて撮影)

カメラマンが集まっているところでは、ハギマシコ目当ての餌まき行為が行われていたようで、このカシラダカもその餌につられて飛来した一羽。自分が餌をまいていなくてもちょっと罪の意識を感じる一枚ですが、保護色効果抜群のカシラダカは土の地面だとよく見えない。お許しを。





年頭所感



公益財団法人 日本鳥類保護連盟 会長 小宮輝之

明けましておめでとうございます。会員の皆さまにとって素晴らしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。皆さまには日頃より日本鳥類保護連盟の活動、運営に温かいご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

昨年の春、柳澤紀夫さんが鳥獣保護への功労により旭日単光章を授与されました。柳澤さんは昭和39年4月から日本鳥類保護連盟に勤務され、平成26年6月に連盟の理事を退任されるまで半世紀の長きにわたり連盟に勤められました。柳澤さんの叙勲は、連盟として一貫して活動してまいりました鳥獣保護への取り組みが認められたことであり、たいへんに名誉ある受賞です。

5月には第79回愛鳥週間を迎え、環境省と共に主催する「全国野鳥保護のつどい」を常陸宮妃殿下の御臨席のもと、令和7年度野生生物保護功労者表彰の受賞者の方々をお招きして執り行いました。日本鳥類保護連盟総裁賞は、日本野鳥の会会長であり、立教大学名誉教授でもある上田恵介さんが受賞されました。

連盟がコンテスト形式で募集している活動に「愛鳥週間用ポスター原画コンクール」があります。愛鳥週間とともに長い歴史があり、連盟が林野庁から引き継ぎ、最優秀賞作品を愛鳥週間ポスターとして作成し、全国に配布しています。令和8年度のポスターには全国29,739点もの応募がありました。シマフクロウステッカーコンテストは7回目を迎え、121点の作品が届きました。最優秀賞作品でステッカーを作りシマフクロウ保護の普及啓発と寄付金募集に役立っています。昨年から新しい試みとして「野鳥を詠む俳句」を募集しました。野鳥を楽しむ情景が浮かび上がる770句の俳句が寄せられました。日本文化である俳句を通じて野鳥を楽しみ、回を重ねたいと考えています。

私は動物園の出身で、飼育係として最初の担当動

物はツキノワグマ、ヒグマとシカ、イノシシという日本の動物たちでした。動物園での最後の仕事もツキノワグマ冬眠展示へのチャレンジで、冬眠中の出産、子育てが実現したのです。昨年はクマが日本各地で人里や市街地に出没し、人身被害が毎日のように伝えられました。農作物、林業への被害はクマだけでなく、シカとイノシシも問題になっていました。鳥についても、鹿児島県出水のツル分散は、鳥インフルエンザの流行で、積極的には進められない状況です。私は日本の動物たちへの思い入れが強く、人と野生動物の共生、共存の難しさに心を痛める一年でした。

昨年11月には第59回全国野生生物保護活動発表大会を開催しました。全国の小学校・中学校・高等学校27校から応募があり、優秀校9校が本大会に進出し、環境省にて活動内容や成果を発表しました。発表内容には、野生生物を保護するために、その地域のくらしや文化にまで踏み込んで活動している報告が目につきました。若い人たちの報告は、人と野生生物がともに暮らしていくための地道な成果であり、次世代への期待が膨らみました。今年は25年ぶりに「子ども鳥博士」のイベントを再開し、鳥や自然に関心を持つ子どもたちを育てていきます。

昨年は愛鳥家の皆さまから寄付やクラウドファンディングによる多くのご支援をいただきました。自然環境の保全、鳥類保護に関心のある企業からも多大な応援をいただきました。おかげさまで、具体的な成果をあげることができました。あらためて御礼申し上げます。

これからも人と鳥との共生をテーマに自然の損失を食い止め、生物多様性の重要性を発信して、わたしたちの自然がいつまでも豊かであることを目指して活動していく所存です。本年も鳥をはじめ野生生物と人間にとって素晴らしい一年になりますように祈念して、新年のご挨拶とさせていただきます。



クラウドファンディング報告

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 調査研究室 文

9月16日から11月7日まで募集していたクラウドファンディング「【第三弾】絶滅危惧種サシバの保全を皆の手で。渡りの全容解明への挑戦」が無事終了いたしました。ご支援にご協力いただいた皆さま、広報にご協力いただいた皆さま、まことにありがとうございました。

目標金額は250万円でしたが、第一目標は大きく超え、ネクストゴールもあとわずかというところまでご支援が伸びました。3,477,500円という大きな支援、誠にありがとうございます。第一弾から第三弾までの支援総額は10,694,500円となり、大台の1千万円を超えることとなりました。また、今回の支援者数は305名、累計334名となり、第一弾から第三弾までの累計支援者数の合計は1,017名と、こちらも大台の千人を超えることができました。大きな節目をこのクラウドファンディングで迎えることができたことに感謝申し上げます。

今回リピート率が支援者数で6割、金額でいうと7割近い数字でした。リピート率は第二弾では4割ほどだったため、この活動に賛同して継続して支援してくれた人が増えていることを嬉しく思います。サシバの保全の輪を広げていくためにも、たくさんのリピーターに引き続きの支援をしていただけるよう努力する一方で、新規支援者数も増やしていきたいと思っています。

今後の予定としては、1月上旬に与那国島、3月上旬に沖縄島、3月下旬にフィリピンで捕獲作業を実施する予定です。GPSタグは皆さまからのご支援と、日

本鳥類保護連盟からの支出で15個購入いたしました。日本鳥類保護連盟の予算も、皆さまからの会費やご寄付で成り立っています。改めて日本鳥類保護連盟の活動を支えてくださっている皆さまに感謝申し上げます。

サシバの渡りルート of 全容解明は時間のかかる作業です。私たちとしても10年間は続けたいと考えています。つまりクラウドファンディングも第十弾までは継続していきます。皆さんと一緒に謎を紐解き、皆さんと一体感を保ちながら保全に繋げていくというコンセプトを大事にしていくためにも、できる限り情報共有はこまめにしていきたいと思っています。そして費用も日本鳥類保護連盟から半分、クラウドファンディングのご支援で半分をまかない実施するという体制も続けていきたいと思っています。

時期については、第一弾は7月20日から8月31日、第二弾は11月18日から1月17日、そしてこの第三弾は9月16日から11月7日と安定せず皆さまにはご迷惑をおかけしましたが、第三弾のこの時期が、秋のサシバの渡りの時期で皆さんと一緒に盛り上がっていいと実感できましたので、今後は秋開催で継続していきたいと思っています。

引き続きの応援よろしく願いいたします。

最新の情報はREADYFORの活動報告のサイトをご覧ください。

<https://readyfor.jp/projects/jspb2025/announcements>



巣箱を架けてみよう

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 調査研究室 藤井 幹 文・写真

鳥の多くは繁殖するために巣を必要とします。一口に巣と言ってもいろいろありますが、真っ先に思い浮かぶのは枝を組んで作った皿型の巣ではないでしょうか。このタイプの巣を使う鳥は、大型の鳥を除けば比較的作る場所に困りません。しかし、皿型の巣とは異なる巣で子育てしているために住宅難に陥っている鳥もいます。その一つが樹洞（木の洞）で営巣する鳥です。都市化や森林管理により自然の樹洞ができるような大きな木が少なくなっているのです。特に市街地ではそういった樹洞が不足しているため、樹洞で営巣する鳥たちは市街地にあるあらゆる隙間、穴を樹洞に見立てて営巣しています。

こういった住宅難の鳥たちのために、代替の住まいとして使われているのが巣箱です。巣箱を使う鳥はシジュウカラなどのカラ類から、スズメ、ムクドリ、大きなものではフクロウ、シマフクロウなどいろいろですが、ここではシジュウカラやスズメが使う巣箱をご紹介します。

●シジュウカラ用巣箱

巣箱は樹洞を見立てた空間を再現するため箱型になっていて、出入り口の穴が開いているのが一般的です（写真1）。穴の直径は27mmから29mmぐらいが良いでしょう。28mmから29mmだとシジュウ



写真1 巣箱とシジュウカラ

カラだけでなくスズメも出入りできますが、スズメも住宅難であることは変わりませんので、シジュウカラだけでなくスズメのためにも巣箱を架けたいと思う方は、29mmぐらいがいいと思います。シジュウカラのために巣箱を架けたいのでスズメには遠慮してほしいという人は、27mmぐらいがいいでしょう。これより小さいと、シジュウカラも個体によって出入りできなくなりますので、もし出入りに苦労しているような場面を見かけたら、少し入り口をやすりで削って広げてあげてください。

●2つ穴巣箱

今まで巣箱と言えば出入りの穴は1つでしたが、日本鳥類保護連盟の調査で2つ穴巣箱が好まれることが分かってきました。穴が2つあると、1つ穴から外敵が侵入しても別の穴から逃げられるので、鳥も安心できるのかもしれませんが、これから巣箱を架ける人は2つ穴巣箱にチャレンジしてみてください。

【2つ穴巣箱についてはこちら
(QRコード)】



●巣箱の架け方

巣箱を架けるときに、茂みの中に隠すように取り付けた方が鳥が安心するからと言って茂みの中に巣箱を架けているのを見かけることがあります。真実は鳥に聞いてみないと分かりませんが、私たちがこれまで架けてきた巣箱では、前に障害物のない開けた場所に架けたものをよく使っていました。穴の前に枝があると、ヘビなどの外敵が侵入しやすくなりますので、できるだけ穴が開いている方向は障害物のない場所を選びましょう。また、巣箱を架けるときは雨水が入りこむのを避けるため、穴が上向きにならないように注意しましょう。その他、巣箱の横に枝があるよう場所はカラスが止まって巣箱が狙われやすくなるので、枝がないような場所がベターです。

高さは猫が飛びついて出入りの穴に届きにくい

1.5～2m程度の高さが理想です。あまり高すぎる必要はありませんので、管理のしやすい場所に取り付けま



写真2 セキュリティカメラの設置例

しょう。巣箱は樹洞の空間よりも広く、鳥たちは好んで巣箱を利用する傾向があります。そのため条件が悪くても利用することがありますが、私たちは巣箱で鳥を誘致するからには安全面を保障してあげる必要があります。取り付けにも十分気を配りましょう。風が強くても落ちないようにしっかりつけてあげる必要があります。取り付ける紐はシュロ縄など木を傷めにくいものが理想です。

●カメラをつけてみる

巣箱を初めて架設するときは、鳥が利用してくれるだけで十分喜べるのですが、それが当たり前になると中がどんな様子なのかが気になってくるのが人の性です。とはいえ繁殖中巣箱を開けて中を覗くと鳥たちもびっくりして怯えてしまいますし、親鳥が警戒して騒ぐとカラスや猫に目をつけられる可能性もあります。そのため巣箱の中を覗くのはかなえられない願望だったのですが、最近はテクノロジーが飛躍的に発展し、安価で私たちの願望をかなえてくれるアイテムも出てきました。その一つがセキュリティ用のカメラです（写真2）。家の中でペットの様子を見守る目的などで用いられるものですが、小型で巣箱に入るものがたくさん出ています。このセキュリティカメラはWi-fiを通して映像をリアルタイムで配信してくれるので、巣箱を架設する場所までWi-fiが届いていれば、家にコードを引き込む必要もありません。また、日当たりの良い場



写真3 ソーラーパネルの設置例

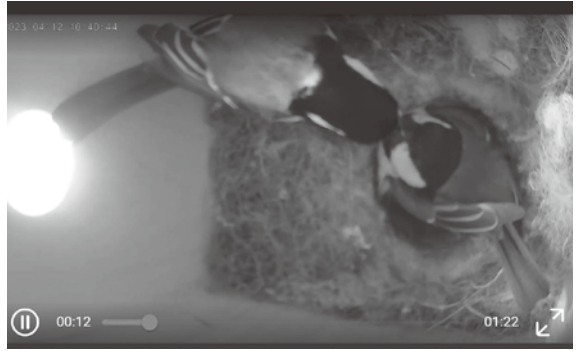


写真4 セキュリティカメラで観察した巣箱の中のシジュウカラ

所であれば、ソーラーパネル（写真3）を一緒に設置すれば電源コードを家まで引っ張る必要もなく、巣箱を架設するだけでいつでも巣箱の中をいつでも見ることができます（写真4）。

●カメラ選定の注意点

セキュリティカメラはかなり小さいものまで販売されていますが、小さいとバッテリー容量が少ないので、雨続きで充電がままならないときに電源が切れるときがあります。切れるとまた接続し直さないといけないので、巣箱に入る大きさであればバッテリー容量が大きいものがベターです。また、セキュリティカメラは超広角のものとあまり広角ではないものがあります。カメラと巣との距離は近いので、広角でないものだとも巣箱内の一部しか映りません。できるだけ広角機能がいいものを選びましょう。

●カメラ利用の注意点

セキュリティカメラには画面の任意の場所を指定して、そこに動きがあると知らせてくれる通知機能や、録画機能もあります。これはとても便利なのですが、バッテリー消費も激しいので、ソーラーパネルで電源を供給する場合はバッテリー切れにならないよう注意が必要です。こういった機能は巣箱に出入りが始まる頃までにして、その後は機能をオフすることをおすすめします。また、リアルタイムで見られると仕事が手につかなくなります。その点も十分ご注意ください！

参考文献

○藤井 幹『自宅を楽しむバードライフ』文一総合出版

ペリット探しをやってみた！

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 普及啓発室 吉田裕樹 文・写真

2026 年から新しい連載として「フィールド探検をやってみた」をスタートします。この企画は、連盟スタッフが野鳥に関する「〇〇をやってみた！」というテーマを掲げ、実際にフィールドを探検するシリーズです。第1回目のテーマは「ペリット探しをやってみた！」。読者の皆さんは、野鳥のペリットに注目したことがあまりないかもしれません。今回は「ペリットって何？」というところからはじめ、実際に1日探したらどんなペリットが見つかるのかをやってみました。

●ペリットとは

ペリットは、鳥が口から吐き出す排出物です（糞とは別物）。鳥には歯がありませんので、食べ物を丸ごと飲み込み、胃の中で消化しますが、消化しきれない硬い骨や殻、種子などは口から吐き出します。これがペリットです。すべての鳥がペリットを出すわけではなく、動物食の猛禽類やカワセミの仲間、木の実を丸ごと飲み込むジョウビタキやツグミなどが代表例です。

●ペリットを探してみた in 宮ヶ瀬湖

私自身、ペリットに特別興味があるわけではないので、普段はあまり気にしていませんでした。イメージとしては「コンクリートや橋の欄干上に落ちているな」程度でした。ただ幸いなことに、連盟にはペリッ

トを調査しているスタッフが在籍しています。探し方のコツを事前に聞くと、「ねぐら近くや道路上の糞の周りは見た方が良い」とアドバイスをもらいました。Good advice！さて、1日でどれだけ見つかるでしょうか。

12月のある日、ペリットを探しに、探鳥地として人気の神奈川県・宮ヶ瀬湖へ向かいました。宮ヶ瀬湖ではハヤブサやミサゴなどの猛禽類が観察でき、カワセミやモズなどペリットを出す小型鳥類も見られます。ペリット探しだけに全集中して、どれほど成果があるか楽しみです。

まずは宮ヶ瀬ダムの上へ行ってみました（写真1）。車を降りて数分後、いきなり第一ペリットを発見！誰が吐き出したものかは分かりませんが、とりあえず第一目標は達成しました（写真2）。宮ヶ瀬ダムは横幅約400mあり、欄干にはカラスや猛禽類がよく止まります。しかもコンクリートに色がついているため、ペリットが見つけやすい！ダム周辺では最終的に4個のペリットを見つけました。

●カワセミのペリットを探してみた

次に、宮ヶ瀬湖畔園地を訪れました。ここは広い芝生広場と親水池があり、モズやカワセミが近くで観察できます。実はこのテーマが決まったとき、「カワセミのペリットを探す」ことが密かな目標でした。



写真1 宮ヶ瀬ダムの環境



写真2 宮ヶ瀬ダムで見つけたペリット（丸枠）



写真3 間近で観察出来たカワセミ

「ペリットを見つける」というミッションは達成したので、ここからは「カワセミのペリットを見つける」モードに切り替えます。

親水池周辺を歩いていると、さっそくカワセミを発見！ 逃げる気配がないので、ペリットを吐く瞬間が見られないか観察していました（写真3）。しばらく観察していると何か口から出した？ 芝生の上になんかが落ちたので確認してみました。ここで「糞の周りを探す」というアドバイスを思い出し、止まっていた場所の下を見ると糞を発見。その周辺を探すと、糞とは違う白い塊が（写真4）。調べると魚の骨が入っており、カワセミのペリットでした！ 宮ヶ瀬湖に着いてから約4時間。思った以上の成果で大満足でした。

●ペリットを探しながら野鳥観察を楽しむ

カワセミのペリットが見つかったので、他の鳥のペリットも探してみることに。芝生広場ではモズが餌を運んでいる姿を目撃しました（写真5）。モズも動物食なのでペリットを吐きます。高鳴きをしていたので、吐き出さないか観察しましたが、今回は観察できませんでした。

次に目の前にジョウビタキが止まりました。口から未消化の種子を吐き出さないか期待して観察しましたが、こちらも今回は見られず。「あれ、普段見慣れている鳥もこんな風に視点を変えて観察すると面白いな」。ペリットを探すことが目的でしたが、その最中にある一定のテーマを決めて野鳥や痕跡を探すと、自然観察の新たな一面を発見した気持ちになり

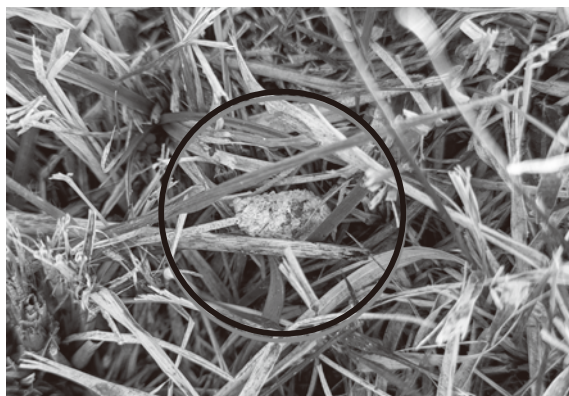


写真4 カワセミのペリットを発見！（丸枠）

ました。

ペリットを探している最中にモズのはやにえを発見。一時はペリット探しそっちのけではやにえ探しも行いました。ただ「はやにえ探しをやってみた！」というテーマでフィールド探検するのも面白そうです。

●解析する楽しさも

気がつけば夕方まで、夢中でペリット探しと野鳥観察を楽しんでいました。6時間の探検で計6個のペリットを発見。今回はペリットの内容については紹介できませんが、「どんなものを食べているのか」を解析するのも非常に面白いポイントです。マニアックなテーマではありますが、ぜひ皆さんもペリット探しのフィールド探検に出かけてみてください！

※公園の種類や場所によっては、ペリットのような「自然物」を拾うことが禁止または制限される可能性があります。



写真5 餌を運ぶモズ

羽根探偵の 謎解きファイル

エピソード6

さとう
郷土マナツ

登場人物

羽根田 翔：探偵業をしているがなぜか羽根について異常に詳しく周囲からは羽根探偵と呼ばれている。基本的に人見知りで不愛想だが羽根を見ると食いついてくる。

鳥居 明子：自然や生きものが好きな高校生。好奇心旺盛で明るい性格。

神谷 信二：博物館の生きもの担当の学芸員。生きものの知識が豊富で人当たりがいい。

明子は休日に近くの公園を散歩していると、池のほとりで^{そうがんきょう のぞ}双眼鏡を覗いて何かを観察している羽根田の姿を見つけた。いつになく^{しんみょう}神秘的な面持ちで一体何を観察しているのだろうか。面白そうな予感がした明子はすぐに羽根田に駆け寄った。

明子：^{ししやう}「師匠～、こんな所で会うなんて^{きぐう}奇遇ですね！何を観察してるんですか？」

羽根田はムツとした表情で明子をチラッと見ると、すぐにまた双眼鏡に目を戻した。

羽根田：「また君か…。カモを観ているだけだ。忙しいから話しかけないでくれ。あと師匠と呼ぶのもやめなさい。」

明子：「あっ、確かにカモがたくさんいますねー！あの首が緑色の鳥がマガモですよ。図鑑で見ました。」

羽根田：「…」

明子：「あれ、池の淵にいっぱい羽根が落ちてる！もしかしてまたオオタカに襲われたんでしょうか！？(写真1) ねー師匠、ほらあれあれ！」

羽根田：「だー、もううるさいな！！今、カモの数を数えているんだから話しかけるんじゃない！あと、あれはオオタカに^{おそ}襲われたんじゃなくてエクリプスから^{かんう}換羽する時期だからたくさん羽根が落ちていただけだ。」

神谷：「羽根田さん、あっちの池のカモのカウント終わりましたよ。おや、明子さん！こんにちは。」

羽根田：「神谷さん、^{じやま}邪魔が入ったせいでこっちはまだカウントが終わりませんよ。」

明子：「神谷さん、こんにちは！カモの数を数えていたんですか？邪魔しちゃってごめんなさい。」

神谷：「いや、いいんですよ。毎年博物館ではこの公園のカモの個体数を数える調査をしているんですが、今年は人手が足りなくて羽根田さんにも協力してもらっていたんです。明子さんもカモの種類を覚えたらぜひ来年協力してください。」

明子：「えっ、私も協力していいんですか？頑張ってカモの種類覚ええます！あっ、ところでエクリプスって何ですか？さっき羽根田さんから聞いたんですけど。」

神谷：「あー、エクリプスっていうのはね、オスのカモが秋に渡ってくる際はメスのような地味な羽になるんだけ



写真1 水辺に溜まった羽根



写真2 コガモ♀のエクリプス



写真3 コガモ♂の繁殖羽

ど、そのメスに似た状態をエクリプスって言うんですよ。オスは日本に渡^{わた}ってきてから綺麗^{きれい}な繁殖羽^{はんしよくう}に抜け変わるんです。」

明子：「へー、渡ってきてから羽根が抜け変わるんですね！」

神谷：「そうなんです、渡る時は地味な色の方が保護色で外敵から見つかりにくいですからね。渡ってきてすぐはオスがまだ地味なのでメスとの区別がつきにくいんですよ。ほら、あのコガモのオスはわずかに顔が赤茶色になってきているのでメスと違うのが分かりますが、まだエクリプスですよ (写真 2)。それに比べてこちらのオスはもう羽根が抜け変わって鮮やかな繁殖羽になっていますね (写真 3)。美しい繁殖羽になったらメスにアプローチしてつがいになるんです。」

明子：「なるほど、じゃああそこに固まって落ちてる羽根もエクリプスですか？」

神谷：「ん？ いや、エクリプスの換羽は体羽^{うじく}だけだからこんな羽軸^{うじく}のある羽根はないはずなんだけど…」

羽根田：「は一、ようやく全種類のカウントが終わりましたよ。神谷さん、調査用紙をお渡しします。」

神谷：「羽根田さんお疲れ様でした、助かりました！ あと、ついでと言っては何ですが明子さんが見つけた羽根が何のカモなのか見てもらえませんか？」

羽根田：「え、神谷さんが教えてあげたらいいじゃないですか！」

神谷：「いや、カモの羽根はあまり得意じゃなくて。お願いしますよ。」

明子：「この羽根なんですけど。綺麗な羽根が何枚かあるんですが色や模様が違うんです。」

羽根田：「種類が違うんだから、色や模様が違って当然だろ。カモの中には次列風切に金属光沢^{よくきよう}の翼鏡^{よくきよう}という部位がある種類がいる。これは翼鏡が青紫色だからマガモで先端の白い帯が太いのも特徴。でこっちが角度によって青や緑色に変化するからカルガモだ (写真 4)。先端は白い帯があまりない。」

明子：「へー、1種類じゃなかったんですね。」

神谷：「もしかすると、あの場所はオオタカの調理場かもしれないですね。」

明子：「調理場？」

神谷：「ええ、オオタカなどの猛禽類^{もうきんるい}はお気に入りの場所で獲物^{えもの}を解体することがあるんですよ。」

明子：「だから何種類も混じっているんですね！」

羽根田：「ん、この羽根！！ コガモと思っていたらシマアジです！！ どちらもマガモやカルガモと比べるとサイズが小さいですが、シマアジの方が翼鏡^{あわ}の緑色が薄い (写真 5)。」

神谷：「おー、カウント調査では出てきませんでしたが、シマアジがいた証拠^{しょうこ}になりましたね！ 明子さんお手柄ですよ。」

明子：「えっ、シマアジ？ ですか？」

羽根田：「魚じゃないからな。」

神谷：「シマアジは小型のカモですよ。目に白色の横長の模様があって、この部分が「シマ」の由来で、味が良いからシマアジになったとか。コガモと比べると日本では数が少なくてなかなか出会えないんですよ。」

明子：「へー、落ちていた羽根でシマアジってカモがいたことが分かったんですね！ やっぱ羽根って面白い！

来年はカモも覚えて師匠と一緒にカウント調査に参加します！」

神谷：「羽根田さん、それでは来年は明子さんと一緒によろしく願いいたします。」

羽根田：「絶対お断りだ！！！」



写真 4 明子が拾った羽根①



写真 5 明子が拾った羽根②

to be continued

参考・引用文献

○藤井 幹『羽根識別マニュアル増補改訂版』文一総合出版

令和8年度

愛鳥週間用ポスター原画コンクール 入賞者&入賞作品！

総裁賞



千葉 前島 鈴葉さん
千葉県立幕張総合高等学校3年

環境大臣賞



静岡 石野 綾乃さん
浜松市立気賀小学校6年

文部科学大臣賞



京都 毛利 心麗さん
京田辺市立桃園小学校6年

令和8年度の愛鳥週間用ポスター原画コンクールの審査会が、令和7年10月17日(金)に都内で行われました。今年度は全国の小中高を含む2,978校から、作品29,739点の応募があり、各都道府県の審査で選ばれた421点が当連盟に届きました。それら優れた作品の中から厳正に審査した結果、千葉県 千葉県立幕張総合高等学校3年 前島鈴葉さんの作品(上)が見事、総裁賞に選ばれました。

この作品は、スズメと目線を合わせた構図が作者の想いをよく表しており、春の青空とサクラの美しい対比、毛並みや足の丁寧な描写も魅力的です。「愛鳥週間」の文字色や足跡の工夫も印象的で、遊び心とメッセージ性の両方が感じられる作品と評価されました。

この作品をもとに、「令和8年度愛鳥週間ポスター」を作成し、全国に配布します。また、各賞の受賞者と作品は次のとおりです。受賞された皆様、おめでとうございます！



香川 浅野 栞奈さん
宇多津町立宇多津中学校3年



栃木 黒羽 優那さん
下野市立国分寺中学校3年



愛知 堀 馨子さん
南山高等学校女子部1年



愛媛 武田 苑子さん
愛媛県立今治工業高等学校2年

林野庁長官賞



北海道 久保 咲楽さん
一般社団法人帯広サドベリーの風
帯広市立大正小学校6年



群馬 松島 遥野さん
前橋市立柏川中学校3年



鳥取 富澤 愛さん
鳥取県立倉吉東高等学校2年

(公財) 日本鳥類保護連盟会長賞



東京 關 瑞季さん
武蔵野市立井之頭小学校6年



愛知 松尾 菜月さん
名古屋市立自由ヶ丘小学校6年



佐賀 高尾 心音さん
佐賀市立勤興小学校5年



埼玉 グエンフェンちゃんさん
八潮市立八潮中学校3年



京都 横川 ミヤさん
宮津市立宮津中学校2年



鹿児島 馬場 ひかりさん
鹿児島市立南中学校2年



富山 岡本 莉奈さん
富山第一高等学校2年



香川 越智 汐里さん
香川県立高松工芸高等学校2年



宮崎 遠竹 美優さん
宮崎県立佐土原高等学校1年

入 選

■小学校の部

青森 山谷 隆晟さん 青森市立佃小学校2年
岩手 横道 駆恩さん 宮古市立川井小学校6年
福島 馬場 渉さん 会津若松市立鶴城小学校4年
福井 海道 灯さん 福井市旭小学校6年
岐阜 高橋 定瑛さん 美濃市立美濃小学校2年
兵庫 中井 梨容子さん 西宮市立上ヶ原小学校5年
熊本 津崎 大知さん 熊本市立出水小学校5年

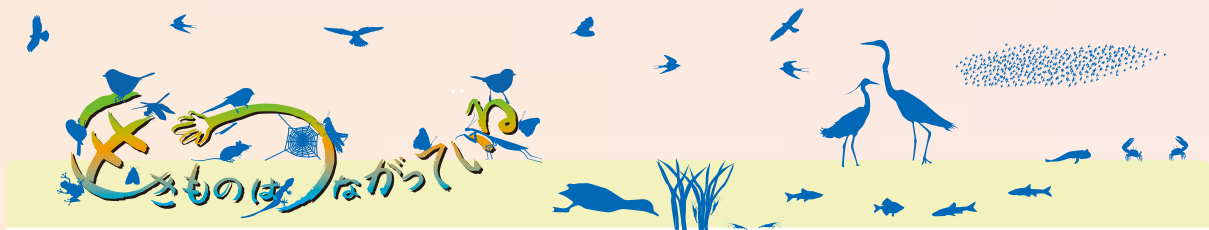
■中学校の部

秋田 田中 友里杏さん 能代市立能代第二中学校1年
茨城 福田 橙花さん 筑西市立下館中学校3年
新潟 佐伯 芽唯さん 新潟市立新津第一中学校3年
石川 大西 ほのかさん 白山市立松任中学校3年
長野 横沢 晴南さん 上田市立真田中学校2年
三重 喜田 李音さん 鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校1年
滋賀 小泉 凛さん 東近江市立能登川中学校2年
大阪 三ノ浦 真羽さん 岸和田市立久米田中学校3年
和歌山 谷 脇 翠さん 近畿大学附属和歌山中学校2年
山口 植楠 葵香さん 岩国市立麻里布中学校3年
福岡 藤井 慧斗さん 春日市立春日南中学校3年
沖縄 屋嘉比 璃子さん 名護市立羽地中学校3年

■高等学校の部

宮城 木村 果蓮さん 宮城県涌谷高等学校2年
山形 左右田 心さん 山形県立長井高等学校2年
神奈川 込山 芽苺さん 神奈川県立小田原城北工業高等学校3年
山梨 野中 真生さん 駿台甲府高等学校2年
奈良 杉本 芽優さん 奈良県立香芝高等学校2年
島根 神門 鈴菜さん 島根県立出雲高等学校2年
岡山 横溝 唯杏さん 岡山県立高梁城南高等学校2年
広島 松岡 芹香さん 福山市立福山高等学校1年
徳島 今柴 友里さん 徳島県立徳島北高等学校2年
高知 亀井 れなさん 高知県立高知小津高等学校2年
長崎 久田 愛実さん 青雲高等学校2年
大分 関 理彩子さん 大分県立大分上野丘高等学校1年

※「入選」の作品につきましては、連盟HPをご覧ください。



ホオジロの仲間

連盟 調査研究室 室長 藤井 幹 文・写真

●ホオジロ科の鳥たち

広い面積の草地環境があれば、高確率で出会うことができる鳥の一つがホオジロです（写真1）。一年中見られる留鳥で、冬でも「チチッ、チチッ」とよく通る声で鳴きます。そして冬が終わって暖かくなる頃にはさえずり始めますが、鳥の声を人の言葉に例えて表す「聞きなし」では、この声は「一筆啓上仕候（いっぴつけいじょうつかまつりそうろう）」や「札幌ラーメン、味噌ラーメン」などいろいろ聞きなされていて、身近な鳥であることが分かります。名前の由来は頬が白いことから名づけられています（ほほ）が、同じ仲間には頬が赤いホオアカという鳥もいます。冬はススキや草本の種などを好んで食べるので、草地や藪（やぶ）の中（えさ）の地表で餌を探しています。このホオジロやホオアカはホオジロ科というグループに分類されていますが、日本で観察されるホオジロ科の鳥は現在 22 種（およ）に及びます。目立たず地味な鳥も多いですが、バードウォッチャーには人気の高いグループです。その中で、冬に本州以南でよく見られるホオジロ科の鳥を見てみましょう。



写真1 ホオジロ

●アオジ

本州の標高の高いところや北海道（はんしよく）で繁殖する鳥で、冬は本州以南の低山や市街地周辺など幅広い環境で冬越しします。そのため公園に藪があるような緑地があれば見られるかもしれません。草地や藪の中で餌を採っていることが多いのでなかなか姿を見せてくれませんが、藪の中から「チッ」とか若干にごった「ヂッ」といった声が聞こえてくればアオジの可能性もあります。名前には「アオ」とついていますが、写真2の通り黄色や薄い黄緑色の鳥です。日本では青リンゴや青葉のように黄緑色のような淡い色や緑色のことを青と呼んでいました。ひと昔前は信号も緑色だったのです。ちなみに青い鳥にはオオルリやルリビタキのように「瑠璃（るり）」という言葉がついています。

●クロジ

アオジと同じく本州の標高の高いところや北海道で繁殖し、冬に本州以南の低山などにやってきて越冬しますが、アオジよりもさらに暗い場所が好きでなかなか出てきてくれません。暗いところが好きな



写真2 アオジ



写真3 クロジ

だけあって、オスの成鳥は名前の由来である鉛色なまりいろをしています（写真3）。声はアオジよりも甲高くかんだか「チッ」とか「チンツ」と歯切れの良い声で鳴くので、聞き比べする機会があれば識別も可能です。

このクロジ、実は大きいクロジと小さいクロジがいます。鳥類標識調査では大きいクロジと小さいクロジが捕まるのです。計測値で見ると、大きいクロジと小さいクロジの2タイプを明確に線引きできないのですが、アオジと同じぐらいの大きさのクロジともっと大きなクロジがいるのは間違いありません。それぞれがどこから来ているのか気になりますね。

●カシラダカ

日本では繁殖しておらず、秋にロシアから渡ってきて本州以南で冬越しします。集団でいることが多く、アオジやクロジと違って林縁や草地の際など開けた場所を好みます。草地や藪の中に逃げ込むことがあまりないため、地面で採餌さいじしているアオジやクロジ、この後で紹介するミヤマホオジロが逃げるときはあまり高く上らず藪の中に入りますが、カシラダカは上に上がり、手の届かない高い木の枝などにとまる傾向があります。アオジやクロジの「チッ」よりも若干濁った声で、強いて言葉で表すなら小さい「ユ」を加えて「ヂュヂュッ」といった感じでしょうか。アオジやクロジのように一音ではなく二音で鳴くことがあるので、見分けるポイントになります。頭部の羽根が少し長く、興奮すると頭が逆立って見えるので、「頭高（かしらだか）」と名付けられています（写真4）。

●ミヤマホオジロ

カシラダカと同じく、基本的には冬越しするためにロシアなどから渡ってきますが、中国地方では繁



写真4 カシラダカ

殖した記録もあります。全国に渡ってきますが、西日本に多い傾向があります。学名に *elegans*（エレガント）と名付けられているようにとても上品に見える鳥で、バードウォッチャーにも人気があります（写真5）。和名のミヤマは「深山」と書きますが、少し奥深いところにいるイメージなのかもしれません。特に東日本の飛来数はそれほど多くはないので、ミヤマホオジロが毎年渡ってくる場所ではカメラマンもたくさんやってきます。声はカシラダカに似ていて、カシラダカと似たような環境にいることが多く、ときどきカシラダカの群れに交じっていることもあります。しかし、逃げるときにはカシラダカは上に、ミヤマホオジロは低く藪のほうに逃げるので、行動の違いでも見つけることができるかもしれません。



写真5 ミヤマホオジロ

身近にいるのに見かけることが少ない鳥ですが、冬も深まり草地や藪の中、周りに落ちている餌が乏しくなるころから公園の道端など目立つところで餌を食べるようになるので、観察するには絶好のチャンスです。特に暖くなり春の渡りに備えてたくさん脂肪を蓄えなければならなくなってくると、食べることに一生懸命で人目も気にしない個体が多くなってきます。この冬は身近で見られるホオジロ科5種を制覇し、行動や鳴き声を観察してみましよう！



ススキ 私たちの自然と文化に根付いた植物

相模原市立博物館 学芸員（生物担当） 秋山幸也 文・写真

●ススキという種

私たちが「ススキ」と呼ぶ植物には、じつはいくつかの種が含まれていることがあります。十五夜のお月見に飾られているのが本当にススキかどうかなどという、無粋なことは言いません。しかし、一般的には区別されていない2種が、ススキ（写真1）とオギ（写真2）です。その違いを確かめながら、ススキという種の特徴を見ていきましょう。

ススキの穂の1本を折り曲げて、小穂（穂についてた粒の1つ）を立ててみます。すると、芒と呼ばれる針状のものが1本伸びているのがススキです（写真3左）。さらにススキは、小穂を包むように伸びる毛が、小穂と同じくらいの長さです。オギは、芒が無くて、そのかわりに小穂のまわりの白く柔らかい毛が、小穂の2倍くらいに長く伸びています（写真3右）。結果として、穂全体を見ると、オギの方がややホワホワとした印象です。

次に、株全体を見てみましょう。ススキは一か所から何本もの稈（茎にあたる部分のイネ科特有の呼び方）が束になって出ます。一方オギは、1本ずつ地面から生えている印象です。ただしこの見分け方は、密生した群落ではなかなかわかりにくいので、結局、近づいて確認する必要があります。



写真1 ススキ



写真2 オギ

そして生育環境にもやや違いがあります。どちらも日当たりの良い場所に生えますが、ススキは乾いた環境を、オギはやや湿った環境を好みます。広い河原では両種とも生育していることが多く、この生育環境の違いがだいたい当てはまります。ただし、しばしば両種が同じ場所に混ざって生えているため、最後はやっぱり目を凝らして小穂を確認する必要があります。

●動物との関係

ススキもオギも、さらにはヨシなども含む大型のイネ科植物の群落は、その遮蔽効果（隠れ家としての役割）から多くの動物を育みます。ススキは束になって生えるので、その根元あたりはヒバリやホオジロなどが営巣します。オギやヨシは1本ずつ立ち上がるので、地上から少し高い場所にオオヨシキリやウグイスが営巣します。また、ヨシもオギも、日本最小のネズミ類であるカヤネズミが球巣を作ります（写真4）。

さらに、ススキ原には多くの昆虫やクモの仲間などが生息しています。冬枯れのススキ原を、シジュウカラやメジロなどがせわしく出入りしているのを見かけます。きっとそうした虫を食べにやってきてい

るのでしょう。他にも早春に、前年から残っている穂の部分を巣材に使う野鳥がたくさんいます。

●人とススキ

ススキが日本の文化に長く密接に結びついてきた証として、伝統的な屋根材であるカヤ（茅）の



写真3 ススキの小穂（左）。芒が1本伸びる。
オギの小穂（右）。芒は無く、毛が長い



写真4 ススキに作られたカヤネズミの球巢

利用があります。カヤは屋根材に使う大型のイネ科植物の総称で、ススキはその代表格です。

カヤ材をとるために管理されてきたススキ原をカヤ場と呼びます。かつて、カヤ場の多くは村の共有地として管理されていました。毎年刈り取って、村の家々の屋根を順に葺き替えていきます。太くて長さが揃っていることが、良質なカヤ材の条件です。定期的な刈り取りと、火入れなどにより栄養分を補給する必要があるため、管理には大勢の手が必要となります。薪炭材をとるための雑木林、そして、牛馬の飼料をとるための林場などとともに、村の共有管理が行われてきたのです。

民俗的な側面も重要です。十五夜のお月様を愛で、豊作を祈る風習に、ススキは欠かせません。月見団子は満月を、ススキはこれから実る稲穂を表現していると言われています。そして、お月見を終えたススキは魔除けとして軒先などに吊るす地域もあります。

●ススキ原のいま

植生遷移から見ると、ススキ原は遷移の中途段階の植生です。洪水や土砂流出などで裸地が出現すると、数年でススキの純群落（ススキ原）となります。河原などでその様子を見てみると、はじめは一年草やセイタカアワダチソウなどが一面を覆うのですが、そのまましばらく洪水が無いと、徐々にススキ原に置き換わっていきます。

さらに年月が経つと、やがてそれは低木の樹林から高木の樹林へと遷移していくのですが、本来の河原は数年ごとに洪水が起きて遷移のふりだしに戻るのです。ススキ原がどこかしらで維持されてきました。

しかし現在、利水・治水の発達によって流水量がコントロールされ、さらに、河原は河川敷利用などによって自然植生の領域が激減しています。茅葺屋根の利用も、保存されている古民家などでごく一部でしかありません。需要とともにススキ原自体が減少しています。

追い打ちをかけるように、外来種の脅威も迫っています。西日本から東日本へと分布を広げつつあるヨシススキ（写真5）は、ススキと生育環境が重なる上に、背丈が4メートルにもなる巨大な植物です。ススキ原がヨシススキに覆われてしまう懸念を否定できません。

私たちの文化に深く根付いてきたススキです。いつの間にか消えてしまうことのないよう、ススキのこれからをしっかりと見守りたいですね。



写真5 ヨシススキ（外来種）

プロフィール

秋山幸也（あきやま・こうや）。1968年神奈川県生まれ。相模原市立博物館学芸員（生物担当）。本文では触れられなかったが、ススキの葉にはクロコノマチョウの幼虫や、アカハネナガウンカなど、フォトジェニックな昆虫が多くいる。夜はカナヘビが葉をベッドにして眠っていたりと、ススキを見ると立ち止まらずにはいられない。

長浜農園 ～農地初のバードピアの紹介～

太平電機 ECO ひいきプロジェクト 社長 樋口公平 文・写真



写真1 長浜農園全景

●バードピアとネイチャーポジティブ

バードピアは人間の生活、生産活動として利用される場所を、野鳥をはじめとする生きものたちが棲みやすく人にとっても快適な環境になるように配慮していき、本来の目的に支障がない範囲で有効活用していく場で、人と生きものとの共存を目指しています。生物多様性の損失を止め、反転させるネイチャーポジティブを目指す時代になってきましたが、バードピアは人の利用する場を野鳥などの生きものに配慮し、さらに水場を作るなどの自然を再生させ、ネイチャーポジティブ実現につながる取り組みです。環境省で取り組まれて

いる「自然共生サイト」とも考え方が近く、その申請書には、他の認定の有無の記入欄があり、バードピアの認定地が自然共生サイトの認定を取得したところも出てきています。

これまでに企業・団体の敷地などが66カ所、個人の庭などが221件指定されています（2025年11月末現在）。今回はバードピアの目的に沿った農園の管理をしている果樹園として農地初のバードピアに登録された、「長浜農園」を紹介します。

●長浜農園のバードピアについて

農地は里地里山として人と自然が共存している



写真2 オーストンオオアカゲラ



写真3 タンカンにきた亜種リュウキュウメジロ

場に位置することが多く、農地がバードピアに登録されることで、ネイチャーポジティブ実現につながり、それらが農産物の価値を高め、持続していくことは大きな意義があると思います。

長浜農園は世界自然遺産に指定された奄美大島の鹿児島県奄美市住用にあり、奄美群島では初の登録地となります。亜熱帯に位置し、日本で2番目に大きい面積のマングローブ原生林に隣接しています(写真1)。農園は谷戸の地形の谷に位置し、南東側は住用川のマングローブ林に隣接し、周囲はスダジイを中心とした照葉樹の山林に囲まれています。谷の部分に果樹園があり(2,719㎡)、果樹部と草地で構成されています。果樹はタンカンが主で一部レモンを生産しています。

●確認された野鳥について

隣接地を含めた果樹園の野鳥を季節ごとに定点調査したところ17科21種の野鳥を確認しました。希少種としてミサゴ、ツミ、サシバ、アマミコゲラ、オーストンオオアカゲラ(写真2)、ハヤブサ、ルリカケス、アカヒゲの8種が天然記念物、環境省、鹿児島県のレッドリストに指定されています。

奄美大島の固有種としてはルリカケス、固有亜種としてオーストンオオアカゲラが確認されました。果樹のエリアでは特に亜種ヒヨドリ、アマミヒヨドリ、亜種リュウキュウメジロ、亜種リュウキュウハシブトガラスが多く見られました。また秋の調査ではサシバ、ハヤブサ、亜種ヒヨドリが



写真4 広い網目と野鳥にくりぬかれたタンカン

渡っており、当地が渡りのコースとなっていることがわかりました。

●タンカンの生産と農業被害

農薬使用回数は鹿児島県の慣行栽培の1/10以下、化学肥料は無使用で、有機肥料を使って栽培しています。また収穫時期に近づくと、ネットを被せますが、網目が大きく、ハシブトガラスだけを避けるようにし、メジロ(写真3)やヒヨドリは網目を潜ってタンカンを食害しているのが確認されています(写真4)。園主はメジロやヒヨドリの食害に関してはある程度我慢し、自然に優しい生産を目指しています。

●今後の長浜農園

周囲の樹木に巣箱の設置を検討しています。亜種アマミシジュウカラやアマミヤマガラ、アカヒゲが利用する可能性があります。また、水場や止まり木を検討されており、伴走支援したいと思っています。

●バードピア登録の農地を応援

生物多様性の高い農地が未来に持続することは、人々が安心安全な農産物の恩恵を受け続けられることでもあり、かつ生きものが生息し続けられることでもあります。バードピアの農地の農産物を購入することで農地が長く続くよう応援をお願いします。

タンカン 5kg/箱 6,000～8,000円(送料別)

【連絡・注文先】

長浜農園 帯屋誠二様

biyabiya.8beh@gmail.com

プロフィール

樋口公平(ひぐち・こうへい)。1965年茅ヶ崎市生まれ。太平電機ECOひいきプロジェクト社長、バードピアアドバイザー、日本野鳥の会理事、日本野鳥の会神奈川支部幹事、三翠会(湘南タゲリ米)会長、161代奄美観光大使。

全国野生生物保護活動発表大会が開催されました！

令和7年11月27日（木）、環境省第一会議室において、環境省との共催により「第59回全国野生生物保護活動発表大会」を開催しました。本年度は全国から27校の応募があり、応募資料に基づく審査の結果、特に優れた取り組みを行っている認められた9校が本大会に進出しました。

当日は、そのうち6校が会場の環境省に集まり、日頃の野生生物保護活動の成果について熱のこもった発表を行いました。また、オンラインでの参加校が1校、さらに学校行事の都合で来場が難しかった2校については、事前に収録した発表動画を上映し、各校の活動内容を紹介しました。発表の合間には、専門家の先生からの丁寧な講評や助言があり、生徒同士の意見交換会では、互いの活動を学び合う有意義な時間となりました。

第59回全国野生生物保護活動発表大会の発表動画はこちら



環境大臣賞

みんなで守ろう！わたしたちの町のブッポウソウ

岡山県 ^{たかはし}高梁市立 ^{かわも}川面小学校

<活動内容>

- ・ブッポウソウの巣箱を製作・設置
- ・巣箱での繁殖観察を通じた生態学習
- ・巣箱カメラで子育ての記録



川面小学校

環境保全の重要性を広める 生徒主体の継続的なビオトープ活動

福島県 福島大学附属中学校

<活動内容>

- ・生徒主体の学校内のビオトープを造成
- ・ふくしまビオトープ子どもサミットの主催
- ・巣箱づくりコンクール、写真や川柳コンテストの開催



福島大学附属中学校

ナゴヤダルマガエルの保全に向けた水田利用と管理体系の構築

愛知県愛知県立 ^{さや}佐屋高等学校

<活動内容>

- ・ナゴヤダルマガエルの生息環境調査・整備
- ・草地管理による生物への影響の検証
- ・学校祭・地域イベント・自然教室などでの保全活動発信



佐屋高校

■文部科学大臣賞

地域の宝・面瀬川から 広がる学び

宮城県 気仙沼市立^{おもせ}面瀬小学校

<活動内容>

- ・面瀬川での生き物観察
- ・川から海へ学びを広げ地域を探究
- ・交流を通じての環境保全の意識向上



面瀬小学校



高川学園中学校・高校

本州西端の サンショウウオをまもる 再生活動と観察会の主催

山口県 学校法人山口^{たかがわがくえん}高川学園
高川学園中学校・高等学校

<活動内容>

- ・オオサンショウウオの重要性を発信
- ・サンショウウオの分布調査と繁殖地再生
- ・観察会の実施

■林野庁長官賞

森・里山を知り、つくる ～残された地域の財産を 伝えるために～

京都府 京都府立^{みやづてんきょう}宮津天橋高等学校

<活動内容>

- ・丹後地域の巨樹の調査
- ・絶滅危惧種サンショウモの保護・研究
- ・里山公園づくりと遊歩道の整備



宮津天橋高校



勝間田高校

勝央町指定文化財 「カゴノキ」群生地を 守る活動

岡山県 岡山県立^{かつまだ}勝間田高等学校

<活動内容>

- ・カゴノキ群生地の保護
- ・モウソウチクの伐採整備
- ・カゴノキ群生地の遊歩道整備

■日本鳥類保護連盟会長賞

守ろう！ 野鳥がすみ続ける 『ふるさと生平』

愛知県 岡崎市立^{おいだいら}生平小学校

<活動内容>

- ・親子探鳥会、野鳥検定、ラブバードウィークの実施
- ・ふるさと学習の実践と発表会
- ・市内の小中学校との交流会



生平小学校



虎姫高校

琵琶湖のヨシ原循環の 健全化を図る 高校生の 取り組み

滋賀県 滋賀県立^{とらひめ}虎姫高等学校

<活動内容>

- ・放置ヨシ群落の再生
- ・ヨシ製品の開発やワークショップでの環境意識啓発
- ・琵琶湖の産業・文化を学ぶ「滋賀のわプロジェクト」推進

第59回全国野生生物保護活動発表大会 講評

第59回全国野生生物保護活動発表大会の審査に携わった、野生動物専門家の大庭照代先生（生物音響資料編纂プロジェクト 主宰）、片岡友美先生（NPO法人 生態工房 理事長）、島田利子先生（全国愛鳥教育研究会 副会長）から、受賞校への講評をいただきました。

気仙沼市立面瀬小学校（文部科学大臣賞）は、6年間を通じて地域に根ざした環境学習を積み上げ、「面瀬川の生き物」から「山・川・里・海のつながり」、さらに気仙沼の海や水産業まで視野を広げて学んでいます。県外の環境保全活動にも触れ、主体的に考える力を育てている点を高く評価します。（大庭）

岡崎市立生平小学校（日本鳥類保護連盟会長賞）は、44年続く愛鳥モデル校として、地域に根ざし学年に応じた活動を丁寧に積み重ねています。環境の変化を敏感に感じ取り、野鳥のあり方を考える姿勢が育まれている点が素晴らしい。コシアカツバメの巣を使うスズメに着目し巣箱を考案する発想もその成果といえます。（島田）

高梁市立川面小学校（環境大臣賞）は、希少でアンブレラ種でもあるブッポウソウを保全対象とする点が効果的で、野生生物保護のモデルとなる取り組みです。巣箱の大きさや形状を工夫する姿勢も素晴らしいです。今後はブッポウソウの減少要因を探り、課題解決へ踏み出す展開を期待します。（片岡）

福島大学附属中学校（文部科学大臣賞）は、生徒発案のジオトープが先生たちを動かし中庭に完成、理科授業にも活用されています。シジュウカラを呼ぶなどの目標の一方で外来生物の多さが課題として見えた点は今後の学びにつながります。「ふくしまジオトープ子どもサミット」主催など発信力ある活動も魅力的で、今後の発展にも期待します。（島田）

学校法人山口高川学園 高川学園中学校・高等学校（文部科学大臣賞）は、中高生によるサンショウウオ2班が、現地調査や個体識別、環境整備など高度な研究を継続している点が素晴らしい。遺伝子汚染や水質悪化の課題を科学的に示し、河川環境の再生にもつなげています。分布域特定や繁殖地の保全にも成果があり、種の保護と環境保全で大きな実績を上げています。（大庭）

愛知県立佐屋高等学校（環境大臣賞）は、愛知県の象徴である絶滅危惧種ナゴヤダルマガエルを保全対象とし、現代農法との関係にも踏み込んだ視点が素晴らしいです。調査計画からフィールド調査、解析まで自主的に進めている点も高く評価出来ます。得られた成果を学会等で発表する今後の展開にも期待します。（片岡）

滋賀県立虎姫高等学校（日本鳥類保護連盟会長賞）は、特定種の保護にとどまらず、生物多様性を地域文化として捉える「生物文化多様性」への視点が秀逸。簡潔で伝わりやすいプレゼンも印象的でした。今後は行政や多様な関係者との連携を広げ、地域全体を巻き込んだ発展的な取り組みへとつなげて欲しいです。（片岡）

京都府立宮津天橋高等学校（林野庁長官賞）は、巨樹3,245本の調査をはじめ、小学生向け森林学習で“感じる”体験を重視し、人と森の関わりを伝えています。サンショウモやミツガシワの保護・研究、シカ害対策にも取り組み、湿地と雑木林を活かした里山公園づくりなど、多面的に地域の自然を守る活動が光っています。（大庭）

岡山県立勝間田高等学校（林野庁長官賞）は、町指定文化財のカゴノキ群落を守るため、侵入したモウソウチクの伐採に森林コースの生徒が尽力し、竹を竹炭として活用した点も評価できます。出城跡を含む高母平^{たかもひら}の遊歩道整備にも関わり、地域の文化財と自然環境を守る取り組みとして今後の発展を期待します。（島田）

受賞された9校の皆さま、おめでとうございます！参加された皆さまにとって有意義な大会になっていると幸いです。

残念ながら受賞に至らなかった学校の活動も甲乙つけがたい内容でした。来年は第60回全国野生生物保護活動発表大会を開催する予定なので、またのご応募お待ちしております。

受賞校発表の様子は
連盟ホームページ（右のQRコードから）
見ることができます。



「第5回国際サシバサミット in 宇検村」が開催されました

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 調査研究室 文・写真

第5回国際サシバサミットが10月25、26日、奄美大島の宇検村で開催されました。栃木県市貝町から始まり、宮古島、台湾、フィリピンサンチェスミラへとバトンタッチされたサミットは、今回日本に戻っての開催となりました（写真1）。

初日は奄美大島の子どもたちの発表や、地元高校書道部のパフォーマンス、日本、フィリピン、台湾、韓国からのサシバに関する活動報告、ポスター発表など盛りだくさんで、大いに盛り上がりました。2日目もやけうちの開運太鼓のパフォーマンスから始まり、これまでの開催地を交えた首長サミット、そしてメインイベントとなる首長宣言が行われ、次の開催地のフィリピンヌエバビスカヤ州にバトンタッチされました（写真1、2）。

ヌエバビスカヤ州では、ヌエバビスカヤ州立大学が中心となって進められる予定で、当連盟の活動地での開催となります。次回開催までしっかりとサポートしていきたいと思います。

ポスター展示では、日本鳥類保護連盟のフィリピンでの活動紹介や、「サシバの渡りルート全容解明プロジェクト」に係る成果なども展示されました（写真3）。参加した各国のポスターも含め、サシバに関わるものだけで30点近いポスターが展示され、ポスター発表の時間には多くの参加者がポスター前に集い、発表者の説明に耳を傾け、そして情報交換をしていました。また、たくさんの

ブースも出展され、地元の製品やこのサミットに合わせて制作されたオリジナル商品の販売などもあり、当連盟のブースも来場者で賑わいました。

また、野生動物画家の岡田宗徳さんは、第二弾のサシバのクラウドファンディングで命名権をご購入いただき、宇検村阿室地区で捕獲したGPS装着個体に「ツムグ（紡ぐ）」という名前をつけられましたが、そのツムグをモデルにして絵を描き、描いた絵画は宇検村に寄贈されました。ツムグという名前には人々や様々な想いを紡いで繋げていってくれることを願って名付けられたとのこと。まさに今回のサミットでは多くの人々の想いが繋がった大会だと感じます。

今回、500名の来場を目指すとして準備を始めたこのサミットは、大きな反響を呼び、スタッフも含めると総勢894名が集まる大きなイベントとなりました。宇検村の元山公知村長の指揮のもと、役場のスタッフが奮闘し、地元宇検村民の協力もあって、盛大に開催されました。素晴らしいサミットとなり、日本がこれだけサシバの保全に関心を示しているということを海外にも発信できたと思います。

次回は2027年3月、フィリピンのヌエバビスカヤ州で開催されます。当連盟もサシバの保全のために、今後も国際サシバサミットに協力していきたいと思っています。



写真1 首長宣言



写真2 宇検村長（右）からヌエバビスカヤ州知事（左）にバトンタッチ



写真3 日本鳥類保護連盟ブースの様子

フィリピンでの活動

公益財団法人 日本鳥類保護連盟

調査研究室 文・写真

10月1日から7日までフィリピンでの活動のため、ミンダナオ島南部、サランガニ州を訪れました。令和7年度のフィリピンでの活動は、皆さまからのご寄付と経団連自然保護基金からの助成金により、日本とフィリピンを行き来するサシバやアカハラダカなどの渡り性猛禽類の保全や、未来を担う子どもたちへの環境教育を目的として実施しています。

今回の目的はサランガニ州で行われるラプターフェスティバルに出席することです。開催場所はラプターヒルと名付けられた小さな丘の上で、地主さんのご厚意で提供していただいている場所です（写真1）。ここはアカハラダカやサシバがインドネシアへ渡っていく際の通過点となっており、サランガニ州環境天然資源局（PENRO）が子どもたちを含めた現地住民と一緒にカウント調査を行っています（写真2）。このカウント調査とフェスティバルはコロナ禍でしばらく中断されていましたが、カウンターパートであるRaptorwatch Network Philippinesの呼びかけで5年ぶりに再開されました。その記念すべき日に、これまで活動に参画してきた日本鳥類保護連盟も出席し、活動を支援してきました。

このフェスティバル中、現地の人たちとアカハラダカの渡りを観察しましたが、次から次へと渡っていくアカハラダカの大群に感動したのはもちろんのこと、観察で盛り上がる子供たちのエネ



写真2 中古双眼鏡で観察する子どもたち

ルギッシュな姿に私たちも元気をもらいました。日本の皆さまからいただいた中古双眼鏡は子どもたちも大喜びで、その双眼鏡で早速渡っていくアカハラダカを観察していました。また、PENROによる猛禽類の絵で作ったパズルで子どもたちも盛り上がっていたほか、鳥類保護をテーマとした絵画コンクールなども開催され、短い時間でしたが子どもたちが渡り性猛禽類の重要性を理解し、積極的にこのイベントに参加しているのがはっきりと伝わってきました。

今回ラプターフェスティバルに参加して一番うれしかったことは、コロナ前には小さな体で一生懸命観察をしていたRenz君が、このフェスティバルではリーダー格として皆を引っ張る成長した姿を見せてくれたことです（写真3）。Renz君はアカハラダカが出てくるといち早く見つけて他の参加者に教えてあげていました。未来の自然保護を担う子どもたちを育てていくという目的を柱の一つとして活動してきましたが、蒔いた種がしっかりと根付き成長していることを実感でき、とても嬉しく思います。今後もこのフィリピンで活躍する若者を増やしていくためにも、環境教育に力を入れていきたいと思います。



写真1 ラプターヒルでの集合写真



写真3 小さい頃のRenz君（左）と成長してリーダーシップを発揮するRenz君（右）

愛鳥懇話会を開催しました

令和7年12月11日(木)、東京都港区にあるアーク森タワー37階「アークヒルズクラブ」で令和7年度愛鳥懇話会を開催しました。今年度も愛鳥家や連盟のステークホルダーの方々をお招きし、盛大に行うことができました。

愛鳥懇話会では「愛鳥週間用ポスター原画コンクール」と「シマフクロウステッカーデザインコンテスト」の授与式を行います。当日は、「令和8年度 愛鳥週間用ポスター原画コンクール 総裁賞」を受賞した千葉県立幕張総合高等学校3年の前島鈴葉さん(写真1)と、「第7回シマフクロウステッカーデザインコンテスト最優秀賞」を受賞した貞富雄太さん(ペンネーム：スナフキン)(写真2)が出席され、参加者の前で授与式を執り行いました。

賞状の授与後、おふたりから受賞コメントをいただきました。前島さんは「スズメは近づくと逃げってしまうので、スズメになりきってスズメの視点で絵を描いた」と語られ、そのコメントがとても微笑ましく感じられました。審査会で高く評価されたポイントを前島さんご自身も紹介され、多くの方の前でも堂々としたスピーチを披露されました。

貞富さんは、事前にシマフクロウの生態や連盟の保護事業について調べたうえでデザインを制作したとコメントされました。このコンテストを通じてシマフクロウの普及啓発に貢献できたと感じました。

授与式終了後は参加者の皆さまとの歓談に移り、受賞者のおふたりも含め、終始和やかな雰囲気でお会を終えることができました。夜が近づくと、窓越しに見える東京の夜景が美しく輝き、参加者の皆さまも感銘を受けていました。



写真1 原画と一緒に記念撮影する前島さんと小宮会長



写真2 最優秀賞デザインのシマフクロウと貞富さん

オンライン決済システムによる会員更新について

会員登録をオンライン決済(Syncable)で登録されている方は、2026年3月1日(日)に登録された口座から会費が自動引き落としされます。新たに更新手続きは不要ですので、お間違いのないようお願いいたします。自動引き落とし後の会員期限は、2027年3月31日になります。

オンライン決済システムに登録されている方は、『私たちの自然』を同封している緑の封筒の宛名ラベルに「クレジット」と表示されていますのでご確認ください(下記参照)。

なお、クレジットカードの登録期限が迫っている方は、QRコードから「クレジットカード情報の変更手順」を参照の上、クレジットカードの更新を1月中にお願いいたします。

 料金効能 ゆうメール 1992004275 3/31/2027 クレジット	〒530-0003 大阪府大阪市北区堂島1-5-30 堂島プラザビル10F ディーエムソリューションズ株式会社 ダイレクトメール事業部 大阪営業所 ご担当者様 【差出人/送付先】 DMSOLUTIONS Co.,Ltd 〒192-0064 東京都八王子市市町1-5	2004-0000_01 大阪府大阪市北区堂島1-5-30 堂島プラザビル10F 
--	---	--

「クレジットカード情報の変更手順」について

使用済み切手・カード類提供のお願い



使用済み切手やカード類（パスカードは除く）を収集して現金化し、活動資金として自然保護に役立てています。切手は、消印も含めて封筒から切り取った状態でお送りください。なお、未使用切手、書き損じのハガキもよろしかったらお送りください。カード類（テレホンカード、図書カード、各種交通機関カード、ダムカード、文化遺産カード、ジオカード、ゲームカード）は、表面に



セロテープやホチキスを使用しないようお願いいたします。

（担当：岡安）

商品の注文について



商品のご購入は代金先払いでお願いしています。ゆうちょ銀行の定額

小為替、現金書留、郵便振替のいずれかで、商品名・個数・お届け先住所・氏名・電話番号（昼間の連絡先）をお書き添えのうえ、お申し込みください。なお、請求書、納品書を必要とされる場合は、担当までご相談ください。（担当：岡安）

バックナンバーの提供について



観察会等を主催する会員の方に、機関誌バックナンバー+入会案内を無料でお分けしています（ただし、梱包送料はご負担いただきます。金額についてはお問い合わせください）。ご希望の方は、①お名前、②ご住所、③電話番号、④使用予定日、⑤希望数をご記入のうえ、FAX・郵便・e-mailのいずれかで、編集担当の吉田までご連絡ください。

会費の振替用紙について



振替用紙は、会費納入月の統一にあたり、年1回、3・4月号に綴じこ

んでありますので、ご了承の程、お願いいたします。

広告募集

本誌では広告を随時募集しています。種類は、裏表紙カラー、本文カラー1頁、本文モノクロ1頁・1/2頁・1/3頁・1/4頁です。詳細は、編集担当の吉田まで、お問い合わせください。

編集後記

▼あけましておめでとうございます。今年は「庭に小鳥を」と「〇〇をやってみた!」という連載が従来の特集の位置づけになります。早速私がペリット探しをやってみました! 実は一人で見つけられる自信が全くなく、企画倒れにならないかすごく心配していました(笑)

(吉田)

ご支援をお願いします

会費・ご寄付は下記の郵便振替口座へ
口座番号：00150-9-19214
加入者名：公益財団法人 日本鳥類保護連盟
※送金の内訳をお忘れなくご記入ください。

【年会費】

特別支援会員	1口	10,000円
個人正会員	1口	5,000円
家族会員	1口	1,000円
学生会員（学生・生徒）	1口	3,000円
法人会員	1口	20,000円

【一般寄付（愛鳥募金）】

当連盟の活動全般に有効に活用させていただきます。

【使途指定寄付】

シマフクロウ、サシバ、奄美大島の希少鳥類の保護など、使用目的を指定していただく寄付です。

詳しくはHPをご覧ください。

<http://www.jspb.org/kihu>

なお、公益財団法人への2千円を超える寄付金は、寄付者の所得税などの税控除の対象になります。

私たちの自然

第67巻1・2月号 通巻No.662 2026年1月1日発行
定価1,200円（税込）（会員の購読料は会費に含まれます）

発行：公益財団法人 日本鳥類保護連盟

代表者：小宮輝之

編集長：中島慶二

編集主幹：吉田裕樹

編集委員：藤井 幹

松永聡美

ISSN 0910-6987

©2026 Japanese Society for Preservation of Birds

誌面デザイン・印刷：日本印刷（株）

公益財団法人 日本鳥類保護連盟

〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5 第10田中ビル3F

TEL：03（5378）5691 FAX：03（5378）5693

ホームページ：<https://www.jspb.org/>

事務局業務時間 9:30～17:30（土・日・祝祭日休）



主な連絡先のEメールアドレス

一般的な問い合わせ：webmaster@jspb.org
愛鳥教材について：岡安 hukuuu@jspb.org
調査・保護について：松永 research@jspb.org
機関誌について：吉田 editor@jspb.org
バードピアについて：岡安 birdpia@spb.org
会員・会費について：吉田 kaiin@jspb.org

facebook：<https://www.facebook.com/jspb.org/>

X：<https://twitter.com/jspb2020>



日本鳥類保護連盟会員限定サイト

<https://www.jspb.org/members>

パスワード：jspb662

会員限定サイトでは『私たちの自然』バックナンバー

（過去1年分）閲覧と一部の商品を会員限定価格で購入できます！





日本の野鳥カレンダー 2027 写真募集!



「日本の野鳥カレンダー 2027」に掲載する野鳥写真の募集を、2026 年 2 月 1 日（日）より開始します。これまでに応募いただいた皆さまの作品はもちろん、まだ応募経験のない方からの挑戦も楽しみにしています。そこで今回は、「日本の野鳥カレンダー」の選考でどのような点を重視しているのかをご紹介します。

●採用しない野鳥

日本の野鳥カレンダーなので、ペットや家禽の写真は受付対象外です。これに加え、ドバトやコジュケイなどの外来種も採用していません。また、卵・ヒナ・営巣中の写真は、繁殖への影響が懸念されるため応募不可としています。

毎年、日本では数例しか記録されないような「珍鳥」の写真が届きますが、こうした稀な鳥も選考の対象外ですのでご注意ください。

●採用する野鳥

人気のあるシマエナガや、ルリビタキのオスのように色彩豊かな鳥だけを選んでいわけではありません。2026 年のカレンダーではツバメやダイサギのように全国でよく見られる種も採用しました。季節感のある植物や風景との組み合わせ、あるいは一瞬の動きを捉えた写真であれば、見慣れた鳥でも十分に魅力的な作品になります。

日頃から目にする野鳥こそ撮影のチャンスも多く、良作が生まれやすい存在です。ぜひ積極的に撮影してみてください。

●求む! 7、8、9 月の写真

毎年、7 月から 9 月に撮影された写真はとても少なく、応募数が不足気味です。この季節は換羽や高温の影響で野鳥の動きが鈍く、撮影しにくい時期でもあります。2026 年版では、イワヒバリ（7 月）、ダイサギ（8 月）、ダイゼン（9 月）が採用されました。

高山帯は樹木が少なく比較的人を恐れない種も多いので撮影しやすいです。干潟のシギ・チドリ類は地味な体色でも採用例が多いです。応募数が少ないということは、採用される可能性が高いということでもあります。他の月と合わせて、7 月から 9 月撮影分もぜひお送りください!

●構図について

構図では、フォーカスされた野鳥と背景となる風景との調和を重視しています。ただしあくまで主役は野鳥。壁に掛けた際、少し離れた場所から見てもどの種か分かることが大切です。

一方で、図鑑写真のように鳥だけが画面いっぱいに写ったものは、カレンダーとしては採用を控える傾向にあります。ページをめくった瞬間から 1 か月間、野鳥と風景のどちらも楽しめる構図をお待ちしています。

●写真加工について

応募作品には、編集が過度に施された写真が少なくありません。彩度を上げすぎて実際とは異なる鮮やかな色になっているもの、シャープ処理が過剰で輪郭が不自然に際立ってしまったものなどが見られます。必要以上の加工は避け、できるだけ自然な姿のまま撮影した写真をご応募ください。

日本鳥類保護連盟では野鳥の写真の募集とあわせて、撮影のマナーについても啓発しています。応募の注意点や応募用紙のダウンロードはホームページをご確認ください。



2026 年 4 月に採用されたツバメ。飛んでいる鳥を撮影するのは難しいですが、毎年必ず飛翔中の写真は採用しています。（撮影：孝森正秀さん）



2026 年 9 月に採用されたダイゼン。落ち着いた体色の鳥と背景は鮮やかな写真が多く届くなかメリハリが出ます（撮影：山口靖弘さん）

【お送り先・お問合せ先】

公益財団法人 日本鳥類保護連盟 カレンダー写真応募係

〒166-0012 東京都杉並区和田 3-54-5 第 10 田中ビル 3F

TEL : 03-5378-5691 FAX : 03-5378-5693

担当：吉田 yoshida@jspb.org / 岡安 okayasu@jspb.org URL : <https://www.jspb.org/calender>



実用新案取得!

2つ穴巣箱

販売価格 2,620 円(税込) ※別途送料

外敵に侵入された際、通常の出入口とは別に側面の穴から逃げ出せるように設計された、2つの出入口を持つ巣箱です。

日本鳥類保護連盟が考案し、営巣率の調査を行った結果、通常の巣箱に比べて高い営巣率が確認されました。実用新案を取得しており、他では取り扱いのない、オリジナルの巣箱です。

自然にとけこむ
小さな命を支える

スズメ・カラ類用

巣箱

**丈夫で
長持ち!**

サントリー育林材 巣箱

販売価格 3,960 円(税込) ※別途送料

サントリーの育林材(ヒノキ)を使用した巣箱です。ヒノキは耐湿・耐水性に優れており、屋外に設置する巣箱の材として最適です。美しい木目も魅力の一つです。

「サントリー天然水の森」でもこの巣箱を使用し、野鳥の保護活動に役立てられています。

スタンダード巣箱

販売価格 2,620 円(税込) ※別途送料

間伐材(杉)を使用した、標準的な形状の巣箱です。防腐剤は使用しておらず、定期的に手入れをすることで繰り返し使うことができます。

安心の定番!

※すべて組み立てた状態で発送します。
組み立て前の状態をご希望の方はご連絡ください。

【送料】1個/710円、2~3個/1,200円、4個以上/ご相談ください
【納期】1週間程度
(注文数によって異なります。詳しくはお問い合わせください)

お問合せ・ご購入は
こちらから

巣箱設置のコツも
紹介しています!



日本鳥類保護連盟では野鳥に関する商品を扱っています
詳しくはホームページをご覧ください

<https://www.jspb.org/shohin>



公益財団法人 日本鳥類保護連盟

電話・FAXでの

お問合わせ・ご注文はこちらから

〒166-0012

東京都杉並区和田 3-54-5

第10 田中ビル 3F

TEL:03-5378-5691 FAX:03-5378-5693



商品の売り上げは全て当連盟の公益活動のために使われます